

淀川水系流域委員会 第 23 回猪名川部会 結果概要

開催日時：2004 年 11 月 2 日（火）16：00～19：10

場 所：天満研修センター 9 F イベントホール

参加者数：委員 10 名、河川管理者（指定席）9 名

一般傍聴者（マスコミ含む）66 名

本稿は、議事の概要を簡略にまとめたものです。詳細な議事内容については、後日公開される議事録をご参照下さい。

1．決定事項

2．審議の概要

事業進捗点検に関する報告と意見交換

- 環境に関する事業進捗点検について
- 治水に関する事業進捗点検について
- 利水に関する事業進捗点検について
- ダム(狭窄部上流の浸水被害)に関する事業進捗点検について

狭窄部上流の目標洪水に関する報告と意見交換

3．一般傍聴者からの意見聴取

1．決定事項

- ・次回の猪名川部会は 12 月 3 日（金）14：00～17：00 天満研修センターにて開催する。

2．審議の概要

事業進捗点検に関する報告と意見交換

各委員より、各々が担当した河川整備計画進捗状況報告への意見について、資料 1「事業進捗に関する委員からの意見」を用いて説明がなされた後、意見交換が行われた。主な意見は以下の通り。

○環境に関する事業進捗点検について

- ・外来種駆除による他の生物への影響、高水敷切り下げによる水質や魚類産卵への影響、魚道設置による外来種増加など、環境に関しては、1 つ 1 つの事業を検討するだけではなく、その結果として地域や流域全体にどのような影響を与えるかまで考えていかないといけない。
- ・そもそも河川に外来種が入ってこないよう根本的な改善が必要だ。フラッシュ放流やブルドーザーによる土砂移動によって、河川の物理的な環境を変えて外来種が生えない条件を整えていく必要があるだろう。その際には、1 つの項目に 1 つの対策だけを考えるのではなく、いくつかの問題を解決していけるような手法を考慮した方がよい。

- ・ 優占帰化している外来種は非常に生命力が強い。外来種駆除による環境への影響は確かにあるかも知れないが、それを検討している間に外来種がどんどん繁茂してしまう。外来種は速やかに駆除していくべきだ。外来種が河川に入ってくるのを防ぐのは無理だろう。生態系に多大な影響を与えている優占帰化した外来種（アレチウリ、ニセアカシア等）は徹底して駆除していくべきだ。
- ・ 日本の在来植物は急峻な河川（荒れ川）に適応してきたもの。元のように急峻な河川に戻せば外来種は減少するだろうが、人間が住めなくなってしまう。やはり、日本固有の自然を守るためにも、できるところでは、外来種の駆除はやっていくべきだ。

○治水に関する事業進捗点検について

- ・ 委員の意見として「11カ所の堤防補強区間の選定が昭和35年8月洪水による想定被害図を元に選定されたように思うが」といった意見があるか、河川管理者に事実確認をお願いしたい。
 - ← 緊急堤防補強区間については、背後地への被害影響の観点から人家が密集している区間、氾濫が拡大する区間等の緊急に整備すべき条件を参考に選定した（河川管理者）。
- ・ 過去の治水計画によって作られた高水敷を切り下げることが可能なかどうか。河川管理者はその可能性について説明し、それが無理ならどういう対応が必要なのか、議論しないといけない。
- ・ 越水する可能性の高い地域（善法寺地区）で、越水対策をしないまま、浸透・洗掘対策を中心とした堤防強化を進めることには賛成できない。
 - ← 善法寺地区は、浸透・洗掘対策がどうしても必要で早急に実施しなければならぬ。このため、平成16年度の実施事業として進めていくので、よろしく願いたい（河川管理者）。
- ・ 「いかなる洪水に対しても破堤による被害を回避・軽減する」という大目標を達成するために、現在実施している事業が適当なのかどうか。浸透・洗掘対策によって堤防が強化されるのは確かだが、大目標を達成するために河川管理者にはもう一歩進めてほしい。また、高水敷を今後どうしていくのか。環境に配慮した治水について考える必要がある。（ダムWGリーダー）。

○利水に関する事業進捗点検について

- ・ 尼崎の工場跡の再開発によって尼崎市の工業用水に新規水需要が発生するのかわかまで含めて、利水者の水需要の精査確認を急いでほしい。
- ・ 長期的な少雨傾向と偏った降雨が懸念されているが、本当なのかどうか。本当であれば、どのような対策をしておけばよいのか。将来の課題として考えておくべき事だと思っている（ダムWGリーダー）。

○ダム（狭窄部上流の浸水被害）に関する事業進捗点検について

- ・狭窄部上流の浸水被害対策案は、ダムの代替案ではない。ダムの是非にかかわらず、やらなければならないことだ（ダムWGリーダー）。
- ・多田地区はどれだけ対策をしても浸水被害を解消することはできず、今後も浸水被害に見舞われるだろう。本来、人家が密集する場所ではなかったという点から長期的な対策を考えるべきだろう（ダムWGリーダー）。

狭窄部上流の目標洪水に関する報告と意見交換

河川管理者より資料2「猪名川狭窄部上流の目標洪水について」を用いて説明がなされた後、意見交換が行われた。主な意見は以下の通り。

- ・目標洪水として、銀橋地点でのピーク流量が既往2位の昭和58年9月洪水を選んだとのことだが、論理性・説得性に欠けると思う。他の地域との整合性を考慮しながら、再考すべきかもしれない（ダムWGリーダー）。
- ・資料2のP2の表がわかりにくい。比較検討しやすいように、次の4つのデータを1ページでまとめて頂きたい。実績の雨量と流量 現況整備で一庫ダム操作なしの場合の流量 現況整備で一庫ダム操作ありの流量 余野川ダムありの流量。この4つを比較検討できるような表をお願いしたい。特に、余野川ダムありの場合の流量は、すでに検討結果が出ているのではないのか（ダムWGリーダー）。
 - ← 現在計算をしているので、完了次第、お示ししたい。第8回ダムWG（11/10）でお示しできるよう努力する（河川管理者）。
- ・目標洪水を簡単に変更しても良いのか。川上ダムでは目標規模の変更に際して、現計画の治水安全度との比較を行っている。また、地元住民への説明はどうするのか。
 - ← 川上ダムと同様に非常に重要なことだと考えている。このため、既往第2位の昭和58年9月洪水に加えて、現計画の狭窄部上流の目標洪水である昭和28年9月洪水に対しても浸水被害が軽減するよう併せて検討を行っていく（河川管理者）。
- ・銀橋上流の治水対策の考え方としては、今後20～30年で銀橋上流の浸水被害は解消できないが、できるだけ被害を軽減していくという考え方が良いと思っている。河川管理者は「目標は既往最大洪水とするが、対応できるのはここまで。河川整備だけでは対応できない」と明確にした方がよいだろう（ダムWGリーダー）。
- ・実際に既往最大の雨が降っているにも関わらず、今後30年間「既往第2位の降雨を目標にします」と言い続けるのには、やはり釈然としない思いがある。河川整備の目標としては既往最大が正直だと思う。
- ・やはり、実績の既往最大降雨で考えていくべきだ。ただ、河川整備には限界があるので、それ以上は、流域対応でいろいろな対策をしていくのが大切だ。
- ・既往第2位を選んだのは、浸水被害を解消できる見込みがあるからなのか。浸水被害

を解消できるのが既往第何位までなのか、河川管理者は明らかにしておくべきだ（ダムWGリーダー）。

← 昭和 58 年 9 月洪水であれば、さまざまな案で何とか対応できるのではないかと
いう感触は持っている（河川管理者）。

- ・ 流域住民にとってわかりやすいのは既往最大だろう。「既往最大の実績洪水を目標に浸水被害を軽減していく」という説明の仕方が住民にとって一番わかりやすい。
- ・ 狭窄部を一部開削した場合の検討結果も示した方が、地元の住民にとって、よりわかりやすい。

← 開削を実施しないのが原則であるが、下流への影響がクリアできるなら、開削もあり得る。開削についてはこれまでも検討してきているので、今後も検討を続ける（河川管理者）。

- ・ 資料 2 の P2 の表を見ると、一庫ダムの効果が非常に大きいことがよくわかる。一庫ダムの放流能力を高めるような対策を考えれば、銀橋の浸水被害をかなり軽減できる。河川管理者は一般住民に対して、豪雨があった場合の危険性とダムの効果を明確に示していった方がよい。

3 . 一般傍聴者からの意見聴取

一般傍聴者 1 名より発言があった。主な意見は以下の通り。

- ・ 委員会は、河川管理者に水需要の精査確認の結果を早急に求めるべきだ。多くの利水者が、今後の方向性を決めつつある。大阪府営水道はダムから撤退して工水転用で乗り切ることを決め、河川管理者に協議を求めている。余野川ダムと丹生ダムに参画している阪神水道事業団は尼崎市の工水転用を決め、奈良県営水道は丹生ダムからの撤退を決めている。京都府営水道は丹生ダムに参画しているが、大口である大阪府営水道と阪神水道事業団が撤退すれば、京都府営水道も撤退せざるを得ないだろう。他にも、西宮市、箕面市、大津市、三重県営水道でも方向性が決まりつつある。委員会は、全ての利水者の精査確認が出そろったのを待つ必要はない。